

Title	熊野民謡集, 松本芳夫編
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1923
Jtitle	史学 Vol.2, No.2 (1923. 2) ,p.96(256)- 97(257)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19230200-0098

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

次に其の内容を見るに、前中後の各編に分たれ、其の前編には元和元年より萬治三年に至る五十三種、中編は寛文元年より貞享五年に至る百十種、後編には元祿三年より同末年迄百五十三種、外に追補として二十九種を収め、更に附録として慶長以前のもの九種を巻尾に添られてある。又巻初には圖版三十九種を挿まれ參考となるば云ふまでも無い。

前記の如く先きに大日本金石史の出版終るや矢つぎ早に今本史の出版を見るに至り、我等讀者は氏の精力に敬服せざるを得ないのである。最近同氏上京の節、氏は引續き大日本金石史中に漏れ或は其の後の發見にかゝるものを一括し其の補遺として出版の準備中であり、並に更に何人も未だ手を下さざりし東京金石史の編纂も計畫中なる事を話されて居つた。猶本史にも豫告してあるが「西鶴研究」を不日出版せらるゝとの事である。(十二月廿九日 武田勝藏)

奈良縣高市郡神社誌

(高市郡教育會發行)

高市郡は大和の塊區なる畝傍地方を包有し到る處に神跡靈地存して、一郡式内社に坐するもの五拾有餘にして、其外由緒淺からざるもの少く無い。本誌これ等諸神社の位置、社格、祭神、御神體由緒沿革、神事、神德等より所傳の文書記録什器等に至る迄詳述し、猶建造物氏子等につきても記してあり、神社研究者は云ふ迄も無く、旅行者の必讀の書である。

次に參考迄に目次を擧げて見ると、

第壹編(前篇)第一章神の意義、第二章神の種類と性質、第三章神社の種類、第四章本郡神社の沿革概説、第五章本郡神社祭神事蹟
第貳編(各篇)第一官幣大社(一)第二郷社(四)指定村社(四一)第四村社(五四)第五無格社(二二)第六雜社(一〇)第七廢社(一〇)第八舊社趾(五)

第參編(後篇)第一章本郡神社の祭神略系譜、第二章本郡神社の祭神と其の神社、第三章本郡各町村の神社一覽、第四章本郡神社の古刻銘一覽、第五章本郡神社の鳥居石燈籠狛犬御湯釜一覽表、第六章本郡神社に關する主要年表

第四編(附録)第一章本郡舊神職家略系圖、第二章神社祭祀令並祭式

猶本誌卷首に神社の寫真七枚の外に本文中に種類參考となる挿圖がある。(武田勝藏)

熊野民謡集

(松本芳夫編 郷土研究社發行)

熊野は昔から民謡の題材を多く呈供してゐる。然らばその熊野自身に如何なる民謡が行はれてゐるか。本書は主として東牟婁郡の中部、太田川沿岸地方の民謡を採録して此問題に一部の解答を與てゐるのである。著者自身は熊野の人であり、黒潮の流れ密柑の實る此郷土に育まれた新進の史學者にして亦歌人である。氏によつて本篇がなつたのはげだし其人を得てゐると云はねばなら

ぬ。

民謡が傳説に比して古代生活の痕迹を保有してゐること、今日
童兒の戯歌と化してゐるものでもその原始に遡れば魔術的宗教的
のものなりしことは此處にわざ／＼述べる必要を見ないであら
う。而も歌謡は民話よりも一層採集が困難であり、節を離れて記
録のみによつて表はせば一般人に對して比較的興味が薄いため今
までその採集は割合に等閑視されてゐたのである。けれどもその
缺陷が今や本篇を先頭として今後續々現はるべき爐邊叢書中の民
謡研究の諸篇によつて補はるれば誠に民俗學のために大慶である
と云はればならぬ。

予の知人の一佛國學生が今日本の歌垣、禰歌の事を熱心に研究
し此歌垣禰歌の際に歌はれた歌謡を採集することを遙々依頼して
來てゐる。然しながら云ふまでもなく此等の習俗は原始日本の遺
物であつてその歌は今は風土記や萬葉集にごく僅少残つてゐるの
みに過ぎない。もう今日に於ては此貴重な民衆の歌謡は到底手に
入れることは出来難いのである此學生は恐らく此等歌謡を通じ、
歌垣かゞひの眞性質を究め、我國古代の社會及び宗教思想を尋
ねんとしてゐるのであらうがその困難は察するにあまりある、今
日の吾々が又現存民謡の採集を怠ると數世紀後の同方面研究者を
して此異國の人の嘗めしが如き困難を味はしむべきではなからう
か。吾人は我日本各地の民間傳承、其中でもことに失はれやすい
歌謡をなるため今の内に記録し置かむことを各地の郷土研究者に
切に希望するものである。(松本信廣)

史學會會報

(神宮皇學館
史學會發行)

大正十年十月二十二日開會式を擧げ、神宮皇學館歴史科を中心
に史學研究を目的として組織せられたる神宮皇學館史學會にては
昨大正十一年六月に至る迄、例會を催す事前後七回に及び、其間
或は伊勢壹志郡に或は飯南郡に史蹟實地踏査を行ひ來りたるが、
更に同七月下旬に及びて機關誌『史學會々報』を創刊するの發展を
見たり。同會報は毎年春秋二回發行の由なるが創刊號には大西源
一氏の「伊賀に於ける大神宮領について」、木村春太郎氏の「春日
社時代祭に就きて」、竹島寛氏の「王朝時代史話」、阪本廣太郎氏の
「齋宮寮の經濟一斑」、千田憲氏の「吉野水分神社考」、磯部精一氏
の「アイヌ民族に就きて」、福田福一郎氏の「縣大養宿禰橋三千代
に就いて」等の諸論篇を收む。尙な眞面目なる研究なるは大に喜
ぶべし、謹んで將來を祝福す。(飯田)

銀行會館なる名辭が約二百年前支那に存せ

し事實の發見

(武藤長藏著、長崎高等商業學校
研究館年報第三册別刷)

武藤氏は數年前國民經濟雜誌に「銀行なる名辭の由來に就て」と
題する論文を發表せられ、其後も絶えず此の問題に留意して居ら
れたやうであつたが。昨年八月、南清旅行の途次、特に之に關す
る資料を採集せんが爲、廣東に到つて、銀號の組合たる銀業行忠